

第二部

I 十戒-----神を信じて生きる道

出エジプト20:2、19:3～6

20:1 それから神は次のすべてのことばを告げられた。

20:2 「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、【主】である。

出エジプト 20：1～2

はじめに

1. 「十戒」に対する印象

多くの人が【反感】を覚える理由を見ておきたい。

- (1) 文語体の古い表現
- (2) キリスト教の与える道徳・倫理的なものと同じ-----古い権威の押し付け
- (3) 人間の自由の拘束と束縛-----息苦しく、堅苦しいと感じる〈禁酒禁煙〉の例
- (4) キリスト教は「愛の宗教」、「福音を信じる宗教」であって、律法と対立するから
- (5) キリスト教は「心の中に平安」だけを扱う宗教で、心の持ち方を与えるもの

2. 十戒は「生きる道」 (出エジプト 20：2)。

聖書の神を信じる信仰者は人生全体に関わり、行動を伴って、具体的に生きることを求められている。それが律法を規範として生きていくことである。「規範」を別な言葉で言えば「道」に当たる。つまり「神を信じて生きる道」が十戒である。

3. 十戒は神とイスラエルの契約関係を現わす

イスラエルの民と同じように、イエス・キリストを信じて救われたものは、そこで目標に達したのではなく、むしろ、救われたものとして長い人生を生きていかなければならない。驚くべき救いに与かったイスラエルは、神の民としてそれ以後も神の前に真実に歩むことを求められたのである。今や、約束の地を目前にして、神はシナイ山でモーセを通してイスラエルにご自身を現わされた。「わたしは-----あなたの神、主である」という宣言は、神とイスラエルの契約関係の確認だったのである。

神は律法を代表する十戒を語る前に、服従を要求して当然の神として、自己紹介をされている。それは、創造主としての主権だけでなく、救済主としての主権を持っておられる方との契約であることを前提にしている (出エジプト 19：3～6)。

4. 十戒は古代イスラエル国家の法典

イスラエルはアブラハム以来、イサク、ヤコブたちの族長時代を経て、ヨセフの時代からエジプトに住み、エジプトの奴隷となっていた。そこで、エジプトから脱出後大いなる民族として、統一国家の制度を整える必要があった。アブラハム契約は、神との個人的契約に止まらず、「大いなる国民とし」（創世記 12：2）という、全人類に及ぶ神の大いなる祝福の契約だったのである。古代国家は社会的な秩序の維持が求められ、その統治機能を果たすために国家の制度、つまり法典を定めなければならなかった。十戒は、制度として国家の法典の形態を持っていたのである。

5. 十戒の授与者は聖書の神

十戒の冒頭の序文で「わたしは、-----あなたの神、主である」と宣言されたことは前述した。この言葉は、十戒の授与者が神であって、それゆえ、神とイスラエルの契約を思い起こさせるものである。それは、単にイスラエル民族固有の神として奉っているだけではない。人類の創造主であり、全世界のすべての人の救いを計画しておられる、歴史のただなかに介入された主なる神なのである。

主なる神は、神ご自身の方からイスラエルを選ばれて、一方的に選び出したアブラハムを慈しみ、憐れみ、彼とその子孫の神となるという宣言であった。それは、創造者と被造物という関係を保ちつつ、さらに神がアブラハムと人格的交わりを求められる契約を結ばれたのである。「アブラハムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた」（同 15：6）。これが、信仰義認の始まりとなった。

6. 十戒の役割

アブラハムは大きな失敗を重ね、罪を犯したが、神の無条件契約は無効になることはなかったのである。紆余曲折しつつ、アブラハムは神の定めを守って生きていった。

これが契約を結ばれたものの生き方であり、わたしたちもイエス・キリストによる救いに与かったものとして、アブラハムの子孫に数えられ、神の契約を常に思い起こし、神の民として生きることができるのである。その道を備えるのがこの十戒である。最初に述べたように、十戒は「神を信じて生きる道」であることを確認しよう。

イスラエルは、この神の救いの御業を決して忘れることなく、子々孫々記憶にとどめた。過ぎ越しのいけにえを屠り、家の鴨居と二本の門柱にその子羊の血を塗る儀式を永遠に守り、家長が子どもたちに教え続けたのである。（出エジプト 12：23～28）。

そして、十戒が唱えられるたびに、神の救いの御業を想起し続けたのである。こうして、十戒は単なる掟ではなく、神の救いの歴史的な救いの業を思い出し、思い起こすために朗読されたのである。この十戒は私たち新約の民である教会にも与えられていて、イエス・キリストの贖いを信じた私たちは、罪の奴隷状態から救い出されたのである。

十戒は信仰の付加物なのではなく、神の民として生きるための本質的要素である。

7. 十戒はキリスト者の生きる規範

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」(マタイ 16:24) と、主は命じられた。キリスト者の生き方は服従の道であり、服従の仕方は十戒に記されている。規範と言えば堅苦しく感じられる方もあるけれど、生きる道といってもいいのである。それは、主キリストとともに歩む生き方であり、単なる戒め、道徳や掟ではなく、神が喜ばれる生きる道であると心得よう。

人は、信仰によって義と認められ、救いに与ることができるのであるが、それで終わりではなく、神の子にふさわしく生きる、「聖化の道」を歩み続けるのである。もちろん、聖霊の導きと助けによらなければ不可能である。「聖化の道」は人生のすべての道程において、神に従っていく歩みであって、十戒は、その信仰告白であり、基準であり、要約でもある。原書にはないが、詩篇 25:4~5 節を参照する。「【主】よ。あなたの道を私に知らせ、あなたの小道を私に教えてください。あなたの真理のうちに私を導き、私を教えてください。あなたこそ、私の救いの神、私は、あなたを一日中待ち望んでいるのです。」

念のための確認であるが、律法の行いは救いの条件ではない。行いが良いので神によって救いを受ける条件とは決してならないのである。「この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです」(エペソ 2:8~9)。

むすび

十戒の序文は、十戒全体を救いの恵みの光の中で受け止めることを教えている。出エジプト記 20 章 3 節の第一戒と切り離して味わうべきものである。今日、序文から教えられたように十戒はキリスト者が何者であるかを定義しているのである。キリスト者は、新しい神の民であって、神の民は、この世にあって、神とともに旅をするときに十戒はその旅を導く道筋となる。また、いかに生きるかという問いかけは、正しさよりも真実さを大切にすることが、次のみことばによって求められている。

「主のおしえは真っ直ぐで/人の心を喜ばせ/主の仰せは清らかで/人の目を明るくする/主からの恐れはきよく/とこしえまでも変わらない/主のさばきはまことであり/とことく正しい」(詩篇 19:8~9)。

「律法は聖なるものです。また戒めも聖なるものであり、正しく良いものです」

(ローマ 7:12)。